

相隣関係からみた都市型住居集合における屋上利用の特性と可能性に関する研究

建築計画分野 山中将史

都市近郊の市街地では、高密度で劣悪な環境が広がり、外部空間が不足する一方で、多くの屋上が集積している。この状況において、屋上を介した挨拶、集合住宅での近隣交流など、屋上の「関係性」によって生起される行為には、屋上の持つ新たな有用性が窺われる。そこで本研究では、①ミニ開発型住宅における屋上利用の傾向や住み手の評価の実態把握を通じて、「関係性」を持つ屋上の活用可能性、独自性を明らかにすること、②屋上の相隣関係が異なる事例における空間利用を比較、分析することで、関係性のあり方、利用への影響を明らかにすることを目的とした。結果、「関係性」には、外部空間の性質の差別化、近隣コミュニティの創出、個人の生活の開示など多様な特性が見られ、これは屋上が庭の補完・代替ではない独自の役割を持ちえる可能性を示している。

1. 研究の背景と目的

都心近郊の市街地では、人口集中、地価の上昇に伴い、一戸当たりの敷地面積は小さくなる一方である。その結果、都市近郊の市街地には、公園や庭といった生活のゆとりとなるような外部空間が不足し、高密度で劣悪な住環境が広がっている。一方で、不燃化や高容積化の要請から、鉄骨造やRC造の戸建住宅や集合住宅が増加しており、都市部では多くの屋上が集積していると思われる。

これまでの研究から、屋上空間は①開放感、眺望の良さ、日当たりの良さなどの「空間的優位性」、②外部空間でありながら外からの視線が通りやすく、高いプライバシーを持つ「離隔性」、③庭や内部機能の代替として、または増築スペースとして利用可能な「余地性」など、屋上独自の性質が認められており、それによって多様な生活行為の生起、居住空間の質的向上などの都市型居住に対する有用性が見られる。一方で、屋上を介した挨拶、集合住宅での近隣交流など、他住戸の屋上との視線や距離感といった「関係性」の性質によって生まれる使われ方も一部では見られる。そこには、市街地の居住環境に対して屋上を持つ新たな有用性が伺われる。

本研究では、他住戸との「関係性」と、屋上と他の外部空間の相隣関係に焦点を当てる。本研究の目的は、①高さ、設えの同じ住宅が高密度に建てられているミニ開発型住宅において、屋上利用の傾向や住み手の評価の実態把握を通じて、「関係性」を持つ屋上の活用可能性、独自性を明らかにすること、②屋上の相隣関係、外部空間の相隣関係が異なる事例における利用の傾向

を比較、分析することにより、関係性のあり方、利用への影響、コミュニティ形成に対する可能性を明らかにすることである。以上をもとに、周辺との相隣関係を持った屋上が「新たな外部空間」として今後の都市居住に対してどのような役割を持ち得るかを検討する。

本研究で対象とする「屋上」とは、屋根の役割を果たす建物の最上部の平面部分で、人の出入りが可能で、空調や高架水槽などの設備機器の置き場とは別に、物干・物置、植栽、楽しみ等に活用されている場所のことである。塔屋や外部階段によりアクセスする屋上だけでなく、居室が隣接するテラス状の屋上も含む。

2. 調査概要

主に都市部で、相隣関係を持つ住居集合を研究対象とする。

1) ミニ開発型住居集合の屋上

土地を細分化し、小規模の敷地に建築された高密度な住宅群の中から、「屋上同士の相隣関係」、「外部空間の相隣関係」の条件から勘案し、「加島」、「ネイキッド・スクエア」、「西九条」、「柏原」の4つの対象地を選定した。「加島」は建物の最上部全てが出入り可能な屋上空間となっており、屋上同士の視線を遮るものはないが、屋上面積が広いため、利用者同士の近接は避けられる。「ネイキッド・スクエア」の屋上部分は、視線が通らないルーフテラスと視線を遮るものがない最上部に分かれ、地上部分には専用庭と共用庭がある。「西九

表1 アンケート調査概要

対象	全体	加島	ネイキッド・スクエア	西九条	柏原
住戸数(空家数)	122(3)	20(0)	37(2)	45(1)	20(0)
対象世帯数	115	20	35	40	20
回収世帯数	57	10	22	15	10
回収率	50%	50%	63%	36%	50%

条」は建物の最上部のうち屋上部分は半分程度の面積の屋上が多く、階段室によって周りからの死角がある。「柏原」は建物の最上部のほぼ全てが出入り可能であるが、屋上へのアクセスは階段室を通じて行われる。屋上同士の間には隔壁があり、視線は全く通らない

調査は、屋上を有する域内の戸建て住宅の居住者を対象に、屋上設置の目的、屋外空間の使われ方、評価、屋上を介した交流、近所付き合いの程度等に関するアンケート調査（個別訪問・留置き式）を行った（回収率50%:57/115）。

2) 先進事例の屋上

調査対象は、「屋上同士の相隣関係」「外部空間の相隣関係」の条件から勘案し、ミニ開発型住宅から選定した8事例、建築雑誌等から選定した「現代長屋 TEN」「SLIDE 西荻」「PARK HOUSE」の3事例である。

調査は、住み手や計画者に対する聞き取りや、屋上の実測・観察記録を行った。

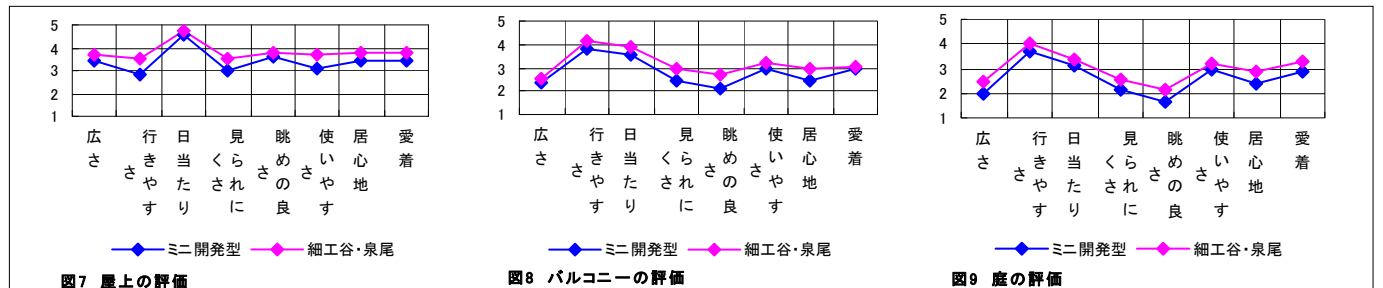
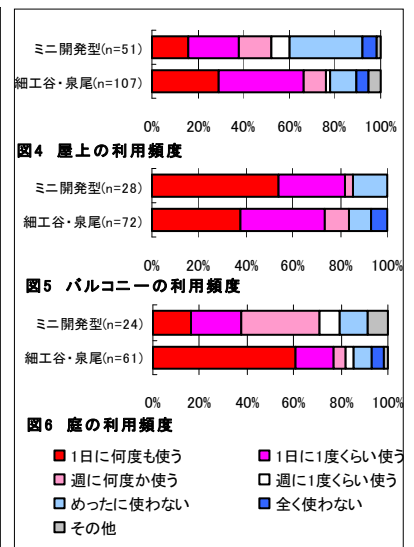
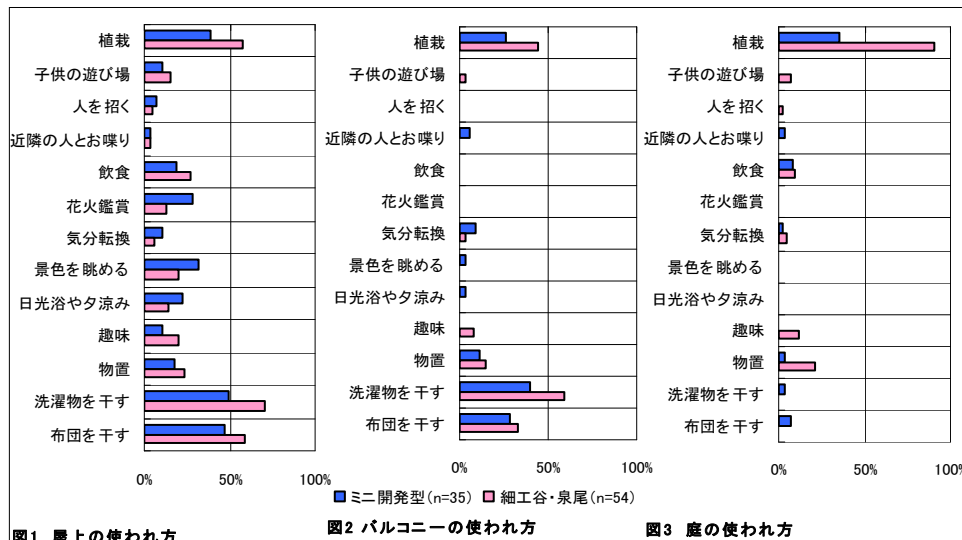
3. ミニ開発型住宅における屋外空間の利用特性

細工谷・泉尾は「離隔性」があり、プライベート性が高く、ミニ開発型住宅は「関係性」があり、プライベート性は低い。この二つにおける屋上の利用を比べると(図1)、どちらも「洗濯物を干す」、「布団を干す」、「植栽」の順に多く全体的な割合の傾向は同じである。しかし、「花火鑑賞」や「景色を眺める」といった道具を必要とせず、時間がかからない使われ方に関しては、ミニ開発型の方が多く、それ以外は少ない。ミニ開発型は周りの屋上から見えやすいことから物が置かれに

くく、階段の勾配が急なことから物を持って屋上まで上がるのも苦勞するためであると考えられる。その他の外部空間についても全体的な割合の傾向は似ているが、ミニ開発型は全体的に割合が少ない(図2,3)。高密度で、日当たりが悪いといった環境の悪さが要因であると考えられる。

利用頻度を比較すると、屋上、地上面では細工谷・泉尾の方が高く、バルコニーではミニ開発型の方が高い(図4-6)。ミニ開発型の屋上では関係性によって気軽に屋上に上がりにくくなっており、その分バルコニーを利用していると考えられる。しかし、ミニ開発型では、屋上の方が高い割合で、多様な利用が見られることから、気軽に利用できるバルコニーは生活の延長として日常的に利用され、屋上は生活の中の刺激としてイベント性の高い利用がされやすいことが分かる。

空間の評価に関しては、どの外部空間においても、ミニ開発型住宅の方が全ての項目の評価が低い(図7-9)。これは高密度で狭小なミニ開発型の特徴が要因であると考えられる。しかし、相対的には評価が低いものの、それぞれの外部空間の評価の傾向は似ており、それぞれが持つ本質的な空間の特性はミニ開発型と細工谷・泉尾の間においても変わらないと言える。特に屋上では、「広さ」、「日当たり」、「眺めの良さ」については、差は小さく、比較的高い値を示していることから、ミニ開発型においても屋上の空間的優位性は失われないことを示している。



4. 相隣関係の違いからみた屋外空間の利用

屋上の使われ方の傾向として、「植木鉢を置く」、「野菜を作る」などの植栽、「子供の遊び場」、「飲食」などの継続的な娯楽、「景色を眺める」、「日光浴や夕涼み」などの瞬間的な娯楽、「物置」や物干しなどの生活の4つに大別できる(表2)。

対象地ごとに屋上利用の傾向を比較すると(図10)、植栽については、ネイキッドで最も多く見られるが、他の対象地の間には大きな差は無く、相隣関係の違いは植栽の使われ方に影響しないと言える。一方、継続的な娯楽では加島が比較的高い割合を示しており、小さい子供を持つ世帯が多いことが要因であると考えられる。しかし、同じように小さい子供を持つ西九条と柏原の入居当初では、周りの屋上との距離感が近い西九条では低く、視線が通らない柏原では高い。これは周りの屋上との距離感が近い屋上では継続的な利用がされにくいことを示している。瞬間的な娯楽では、加島・西九条に比べると、ネイキッド・柏原の割合が高いことから、屋上に隣接した居室を持っていることによるアクセスのしやすさが利用を促していると言える。また、生活についても、視線の通りにくい屋上を持つネイキッド・柏原の割合が高い。

利用頻度を見ると(図11-14)、生活の使われ方がされている屋外空間ほど、利用の頻度が高くなる傾向にあ

る。加島の屋上やネイキッドの最上部は娯楽の使われ方の割合は高かったが、利用頻度は低く、娯楽の使われ方は日常的には行われていないことを示している。

各外部空間の使われ方を植栽、継続的な娯楽、瞬間的な娯楽、生活の組み合わせによって整理した(表3)。加島やネイキッドのような屋上の相隣関係が強い対象地ほど、外部空間を複合的に利用している世帯の割合が高く、反対に柏原では屋上を単独で利用している世帯の割合が高い。また、複合の重複関係を①屋上と他の外部空間で同じ使われ方をしている重複型、②屋上の使われ方の一部が他の外部空間でも行われている包摂型、③使われ方の一部が重複している部分重複型、④各外部空間でそれぞれ異なった使い方をしている独自型の4つに大別し(図17)、対象地ごとの世帯数を整理した(図16)。屋上の相隣関係が強い対象地ほど包摂型が少なく、部分重複型や独自型が多いことが分かる。

表2 使われ方の分類

植栽	継続的な娯楽	瞬間的な娯楽	生活
植木鉢を置く	子供の遊び場	花火鑑賞	物置
野菜を作る	人を招く	景色を眺める	洗濯物を干す
花壇を作る	飲食	日光浴や夕涼み	布団を干す

表3 外部空間の使用箇所と使われ方

重複関係	加島				重複関係	ネイキッド・スクエア			
	屋上	バルコニー	庭	数		屋上	バルコニー	庭	数
複合	GAR	IGL	IG	7	複合	RL	IGL	IGR	18
	AR	IGRL	IG			GR	IGL	IG	
	AL	IL	IL			RL	IL	IG	
	GA	IL	IL			RL	IL	GA	
屋上単独	ARL			2	屋上単独	GAR	RL	IGR	3
	AR					GRL	IGRL	IG	
バルコニー単独		IGL		1	バルコニー単独		IL	GA	2
						GRL	GARL	GA	
複合	GRL	GARL	GA	8	複合	G	G	G	18
	G	IGRL	IG			GR	G	IG	
	GAR	IG				R	G		
	GL	IL				R	AL		
	AR	RL				ARL	IGR		
	RL	IL				GL	IG		
屋上単独	GAR			3	屋上単独	G	IG	3	
	GRL					GL	IG		
バルコニー単独		IGL		2	バルコニー単独		IL	IG	2
						RL	IG		
複合	GRL	GAL		2	複合		IL	GAR	3
	RL	IG				RL	GR		
屋上単独	GARL			2	屋上単独		R		1
	GARL					AL	G		

G:植栽 A:継続的な娯楽 R:瞬間的な娯楽 L:生活

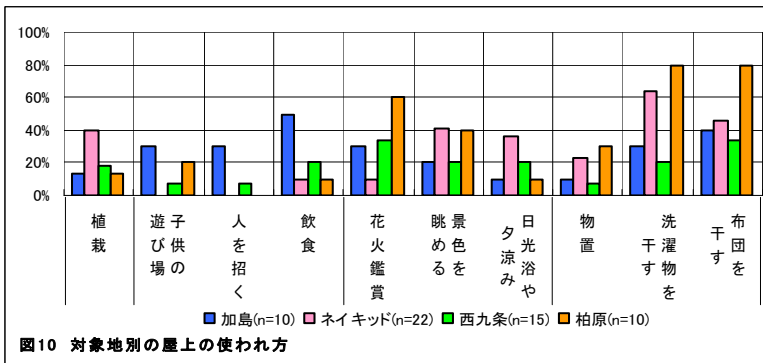


図10 対象地別の屋上の使われ方

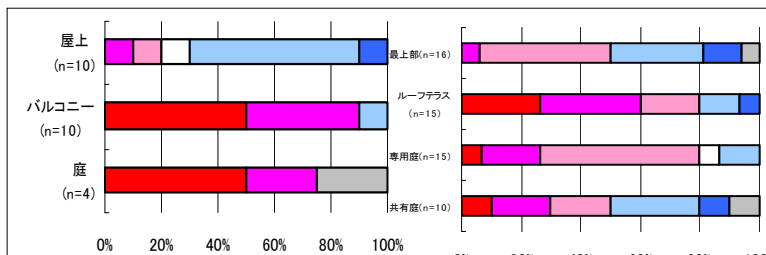


図11 加島の外部空間の利用頻度

図12 ネイキッドの外部空間の利用頻度

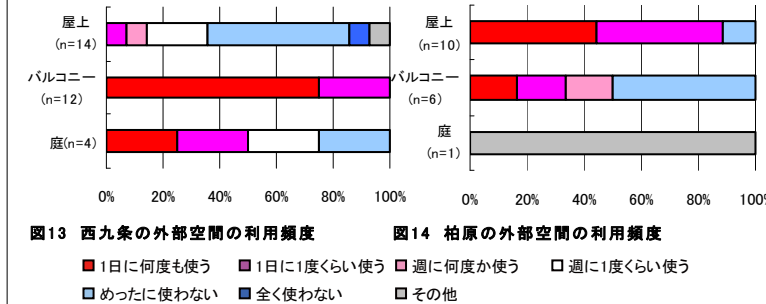


図13 西九条の外部空間の利用頻度

図14 柏原の外部空間の利用頻度

■ 1日に何度も使う ■ 1日に1度くらい使う □ 週に何度も使う □ 週に1度くらい使う
■ めったに使わない ■ 全く使わない □ その他

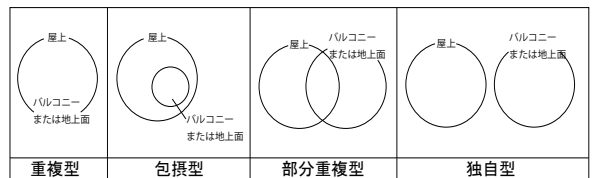


図15 外部空間の使われ方の重複関係

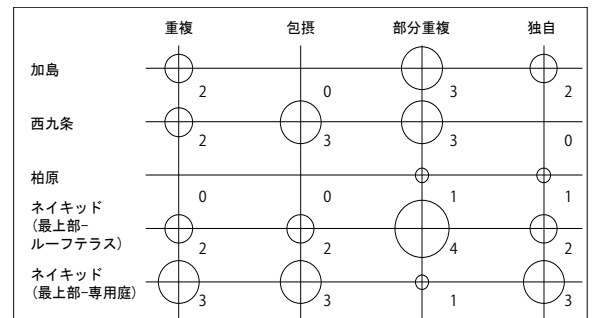


図16 使われ方の重複関係

以上から、屋上が強い相隣関係を持っているほど、他の外部空間との空間の性質の違いが顕著になり、屋上では娯楽、バルコニーでは生活というように使い分けられる傾向がある。その結果、外部空間がそれぞれ異なる役割を持ち、利用されやすくなる。また、植栽や生活の使われ方が重複されやすく、娯楽の使われ方は屋上以外ではあまり見られないことから、屋上のみが娯楽のためのスペースとしてのポテンシャルを持っていることが分かる。反対に、屋上の相隣関係が弱く、プライベート性が高いと、屋上の空間的優位性によって、植栽や生活といったほとんどの使われ方が屋上でされ、他の外部空間の利用が少なくなる傾向にある。

5. ミニ開発型住宅における屋上の特性

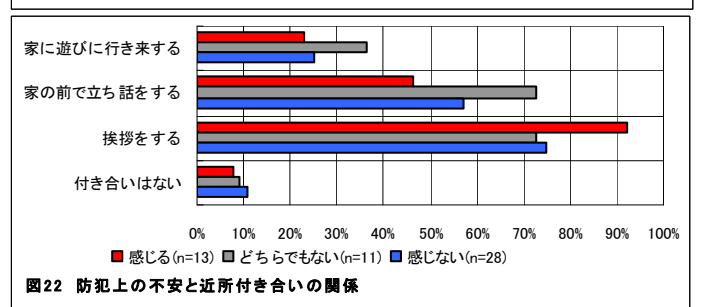
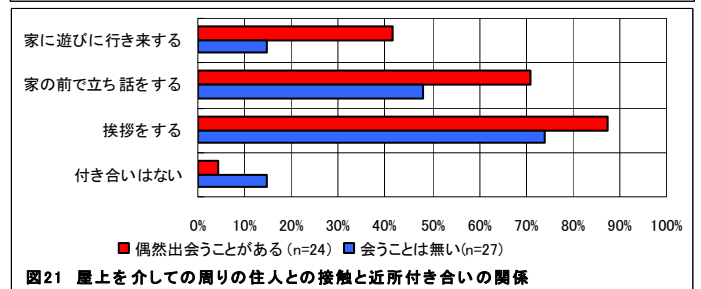
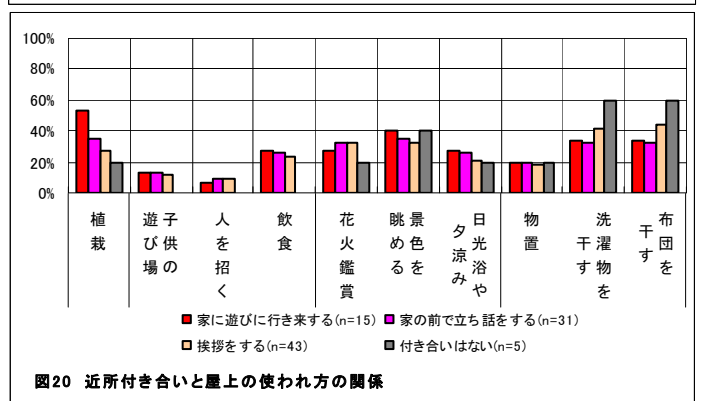
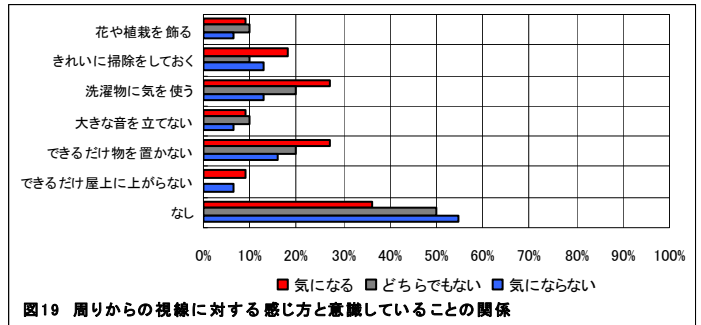
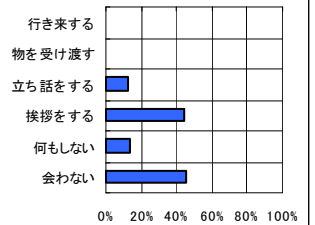
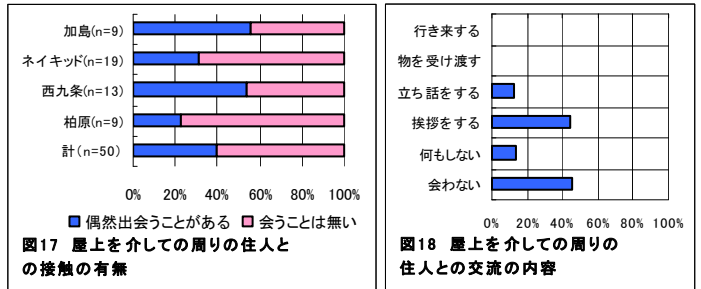
屋上を介しての周りの住人との接触は、加島や西九条では多く、柏原では少ない(図 17)。視線が通りやすいほど接触する割合が高いと言える。しかし、隔壁によって視線が通らない柏原においても少ないながら「偶然出会うことがある」の回答が見られ、視線が通らなくても音や気配による接触もあることが分かる。また、「時間を合わせて会うことがある」、「会うことを避けている」の回答はどの対象地においても見られず、周りの住人との接触が直接的に屋上へ上がることを促したり、阻害したりすることは無い。

また、屋上で会うことのあると回答した世帯のほとんどが「挨拶をする」と回答しており、「立ち話をする」と回答した世帯も 3 分の 1 程度見られる(図 18)。「乗り越えて行き来をする」、「物の受け渡しをする」については、どの対象地においても回答は見られないことから、屋上を介した住人同士の関わり合いは立ち話までに戸留まっていることが分かる。

周りからの視線に対する感じから意識していることとの関係を見ると(図 19)、「なし」については気にならないと回答した世帯の割合が最も高いものの、55%に留まっており、視線に対して気にならないと感じながらも何らかの対応をしている世帯が半数近くいることが分かる。このことから、視線を気にしていなくても、周りの住人を意識することで、屋上の利用に対して少なからず影響していると言える。反対に、視線が気にはなるものの、何の対応もしていない世帯が 35%程度いることが分かる。また、「花や植栽を飾る」や「きれいに掃除をしておく」と回答している世帯が少ないながらも見られることから、屋上の関係性が利用を促す事例もあることが分かる。

近所付き合いと使われ方の関係を見ると(図 20)、生活の使われ方については、付き合いはないと回答した世帯の割合が高かったが、それ以外の使われ方については近所付き合いの程度が高いほど、利用の割合が高い。特に、継続的な娯楽の使い方をして

の中に、付き合いはないと回答した世帯はおらず、近所付き合いの程度が高い世帯ほど、生活だけでなく多様な使い方していることが分かる。これは、近所付き合いをしている世帯ほど、生活以外の使われ方では見られることへの抵抗が薄れ、利用の割合が増えると考えられる。また、それらの利用の割合が増えるほど、周りの屋上の住人との接触も増え、さらに近所付き合いを促進する可能性もある。



屋上を介して周りの家の住人と出会うことがあると回答した世帯ではどの近所付き合いも高い割合を示し、近所付き合いの程度が高いほどその差も大きくなっている(図 21)。反対に、会うことは無いと回答した世帯では付き合いが無い割合が高かった。このことから、屋上で周りの家の住人と顔を合わすという相隣関係には、近所付き合いを生み、より濃い付き合いに発展させる可能性が窺える。

防犯上の不安と近所付き合いの関係を見ると(図 22)、「挨拶をする」については、不安を感じると回答した割合が高かったが、それ以外では感じないと回答した割合が高い。このことから、挨拶程度の付き合いでは防犯上の不安が薄れることは少ないが、より濃い近所付き合いをし、周りの家の住人との関係を築いていくことで、防犯に対する不安を和らげることができると考えられる。また、「付き合いはない」については、周りの住人の存在を意識していないことによる結果であると推測される。

6. 先進事例にみる屋上の関係性・アクセスと利用の関係

1) ミニ開発型住宅

屋上の高さが同じ、視線が通るなどの相隣関係によって、屋上を介して挨拶やお喋りのような交流が発生し、それが近所付き合いの契機になったり、より深い付き合いへの発展を促したりする事例が見られる。しかし、それらの交流は偶発的なものでしかなく、あくまでも屋上はプライベート空間であるという意識を持っている。また、入居当初は 2 章で述べたような非日

常を味わうような利用が多く、アクセスの悪さや子供の成長によって時間と共に少なくなっていく傾向にあるが、生活の使われ方についてはそのまま使われている事例が多い。

以上から、屋上を媒介とした近隣コミュニティの生成に対して有用性は伺われるものの、多様な利用を継続的に行っていく上での課題は多い。

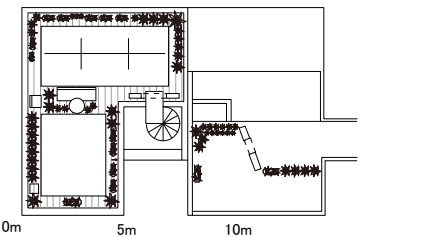
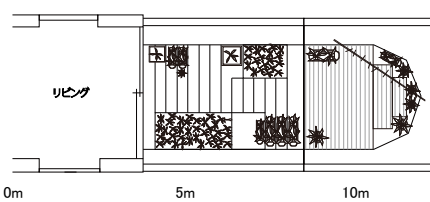
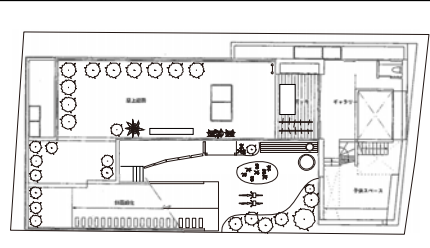
2) 現代長屋 TEN

コーポラティブ住宅なので、元々住人同士の付き合いは深く[1] ([数字]: 表 4 の番号に対応)、屋上が繋がっていることに対しての不安や使いにくさといった否定的な発言は見られなかった[2][3]。屋上ではパーティーや趣味の共有など住人同士の交流[4][5][6]が活発に行われており、コミュニティスペースとしての役割は十分果たされていると言える。同時に、植木鉢を置くことによる領有が見られた。長屋建てにおける住戸の境がそのまま屋上でも適用されており、それぞれの住戸の真上の領域を出ないように植木鉢が置かれている。しかし、散歩をするといった共用部としての利用の邪魔にならないよう、通りやすいように壁際に配置する、綺麗に掃除しておくといった配慮[7][8]が見られ、洗濯物干しや物置といった利用もバルコニーで行われている[9]。住戸間で繋がれた屋上は、個人、世帯といった枠を超えた集団での離隔の意識によって、個人のスペースでも公共のスペースでもない中間の性質を持っていると言える。

3) SLIDE 西荻

屋上同士や屋上と中庭の間の視線が意識されており、他の住戸で育てられている緑を見て楽しんでいるこ

表 4 先進事例の平面図とヒアリング結果

<p>現代長屋 TEN</p> 	<p>[1] 初めの頃はかなり密度の濃い関係で、お互いよく知ってたり、仲は悪くない、ただ、普段は会う頻度は多くないと思う、元々職場だったけど、変わっていったので、今はちょっとバラバラになっているかもしれない。 [2] プライバシーとかはあまり関係ない、じゆうたんとか干してたり、一番上に干したほうが干しやすい。 [3] 防犯の不安については感じない、そういう不安や防犯のことは考えてない。本当に簡単に入る人が、みんな下だけ掛かっていたらいいわと思ってる。言われるまで考えたこともなかった。 [4] 夜は散歩をしているなというのが音でわかる。他にも椅子を置いてみんまで飲んでいたり。 [5] たとえば、一番端で、野菜とかを作っているけど、やるわって言ってもらえる。そこで遭遇したらそうなるけど、下にわざわざ下りてきてとかはない。ベランダには挨拶したりする。屋上をよく使っている人同士ではよく喋ったり、同じ趣味を共有している。 [6] 最初にイベントはここ(共有テラス)で、ウェディングパーティーをした。 [7] 意識していることはあまり無いです。行っても分らないように、あんまり手入れてなくてすいません。でも散歩とかしてはるから、通りやすいとか、迷惑を架けない程度にしている。散歩とかで使ってもらうのは全然いいと思ってる。極力この家汚いと思われへん程度で終わってしまっている。 [8] みんなで、ここはみんなが通る空間、ここは自分が使っている空間という風に決めていた。 [9] 洗濯物とかは個人のバルコニーで干す。乾燥機もあるし。</p>
<p>SLIDE 西荻</p> 	<p>[10] 中庭を見ることはあります。夏は緑が目にも優しいし、夜になると、明かりが灯るのが好きです。 [11] 風景よりは楽しい方がいいかなと思う。下に住んでいる人からはよく見せてと聞かれるし、風が強い日に花がすごい散ってしまったりとあって、多分地下の住戸の人は大変だろうと思う。でもバラの花が落ちてきて喜んでた。逆にうちから中庭を見下ろすと奥さんがガーデニングが好きなので見て楽しい。洗濯物とかを干していてもそれはそれで生活して感じていると思うので、正直あまり気にしていない。 [12] 洗濯物は一応見られて困るものは室内で乾燥機を使っている。でも意外と植木もあるし、他からはあまり見えない。他の家を見ても、あまり見えないし、見ない。皆さん気にしていないんじゃないか。 [13] 天気がいい日やお客さんが来たときは、外の階段に座って食べたりします。大勢で来たときに椅子代わりに使うくらいです。 [14] 平らでそのまま繋がっている訳ではないので、リビングと繋げて使うことは無いんですけど、風景を含めて一つの空間という気もする。開けて使うというのはまたちょっと違う。 [15] 普通の平らな庭とは違うので、不便さもあるけど、楽しい感じがしますね。 [16] 段になっているので、花がたくさん見える。平らな所だったら奥のものは見えないので。地震のときはちょっとヒヤッとしましたけど、結構視線が上に行くのいいかな。空が広く見える。光もたくさん入ってくるも、朝から夕方まで電灯を点けなくても大丈夫。夕方は富士山と夕焼けと一緒に見える。</p>
<p>PARK HOUSE</p> 	<p>[17] (木は) 目隠しをしています。周りにマンションとかいっぱいあるので、見えないようにするために。 [18] 斜面緑地が逆に外部の視線を遮断して、プライバシーをゆるやかに守るような空間的な装置となることを意図した。 [19] 椅子を上に出して、景色というか、自分の家の庭を眺める。主人がよくやっていた。考え事をするときとか。だからほっとしていると同じような感じなんですけど。 [20] 私は家の中から行きますけど、主人は外から行くことが多い。何かの作業をするときなので、まずガレージに行って、何か道具を持って、そのまま上がっています。 [21] それぞれ繋がっているんですけど、一つ一つ見ると、三つの要素が、緩やかに各々の機能を持っているというような関係を意図しました。 [22] まだ子供が小さかったので、上に行って、そのまま家の中をぐるぐるできるようにしたいと言っていた。最初は木も全然なかったが、自分で全部植えた。 [23] 三輪車に乗ったり、鉄棒したり、友達が遊びに来たら、家の延長なので戦いごっこをしてそのまま外に出たりとか、おにごっこ、かくれんぼ、などです。 [24] 友達です。ご近所付き合いがあんまりなくて。(パーベキューをするとか) 言われたいです。言いたいかも無いんですけど、でも、上でやるの、煙は上に行くので、それほど周りには迷惑は掛かってないような気がする。 [25] 屋上の使い勝手はリースペースとして何しても使える。子供が遊んだりとか、小さな木を植えてガーデニングをしたりとか、色んな使い方ができる。だから、セカンドリビングであると同時に、リースペースとして考えるような空間を想定した。</p>

と[10]や、逆に植栽を育てることで周りの住戸からの風景をより良いものにしたという意識を持っていること[11]から、屋上同士での直接的な交流は少ないものの、他住戸に対する意識が利用を促していると言える。また、リビングから直接屋上へ続く階段が伸びていることによって、屋上へのアクセスの悪さはかなり軽減されている。さらに、植栽が置かれる、椅子にするといった利用[13]や、リビングからの景色の一部として機能[14]など、階段自体がアクセス経路だけに留まらない役割を持っている[15][16]。

4) PARK HOUSE

周りの住宅との関係性は無いものの、視線を遮るために目隠しとして地上庭から斜面緑地、屋上にかけて、外部からの視線を遮るようにぐるりと樹木を植えており[17][18]、他者の視線を意識することによって屋上の利用が大きく影響を受けている。また、屋上から地上庭を眺めるといった利用[19]や、斜面緑地で繋がっていることによる空間の連続性[20][21]など、住戸内の外部空間には強い相関関係が見られる。さらに、外部空間の利用を連続的に行うことによって[22][23]、屋上へのアクセスの悪さが軽減されている。

7. まとめ

1) 「関係性」の実態

屋上が相隣関係にあることで、屋上を介して顔を会わせたり、周りからの視線を感じたりといった居住者同士の繋がりが生まれる。また、そのような直接的な接触が無くても、他の居住者の存在への意識が、屋上の使われ方の阻害、または新たなアクティビティの誘発を促し、隔離された屋上とは異なる使われ方の傾向が見られる。

2) 使われ方の傾向

視線が通りやすく、強い相隣関係にあることで、洗濯物や不用品といった物を置くことに抵抗を感じさせ、生活が少なくなる。一方で、余ったスペースを埋めるように娯楽が多くなる。その傾向が強くなると利用頻度が低くなるが、使いやすさや愛着といった評価は下がらない。「関係性」によって屋上は日常的に利用されず、普段の生活から切り離されたイベント性の高い空間として機能し、庭の補完・代替ではない新たな外部空間としての性質を持つ。

3) 外部空間の役割分担

屋上が娯楽で占められることで、バルコニーの生活が多くなる。イベント性の高い屋上に対して、生活空間としてのバルコニー、接地性の高い地上庭というように外部空間の性質の違いが顕著になり、それぞれに固有の利用を促す。このような外部空間の連携により、高密度で狭小な都市型住宅において、多様な外部空間の確保に繋がる。また、PARK HOUSEの事例に見られ

るような外部空間同士の繋がりによるアクティビティの誘発の可能性に対しても、外部空間の性質の違いは必須である。

4) 近隣コミュニティ形成の契機

屋上を介して周りの住宅の居住者と出会うことで、挨拶や立ち話などの交流に発展する事例は多い。このような交流を契機としてコミュニティの輪が広がり、より強固になる可能性は大いにある。また、周囲の居住者との付き合いが濃くなり、仲間意識が芽生えることで、娯楽や植栽のような使われ方に関しては見られることへの抵抗が減り、より屋上利用が活発になる。また、相隣関係の課題の一つである防犯性に関しても、お互いを知ることによって不安を減らすことが可能である。

5) 生活を開く装置

相隣関係にある屋上では飲食や遊び場などの利用が増え、植栽を飾る、綺麗にしておくなどの、周りの居住者を意識した利用が見られる。また、現代長屋TENの屋上では、共有スペースであると同時に、個人の植木鉢が置かれることによる領有が見られる。これらは屋上を通して個人の生活を外へ開く可能性を示唆している。

6) 継続的に利用するための課題と解決案

入居当初に比べて屋上の利用が減少していく事例は多い。その主な要因は、①子供の成長によって娯楽が減少すること、②加齢によって身体的に屋上に上がることが難しくなること、③アクセス性の悪さによって上がることが面倒に感じることの3つである。①に関しては、個人の趣向による所が大きく、現状では有効な解決案は見つかっていない。②と③に関しては、SLIDE 西荻の階段やPARK HOUSEの斜面緑化に見られるように、屋上までのアクセスを単なる経路とするのではなく、それ自体を利用可能な空間とすることで、屋上までの空間を段階的に利用しながらアクセスすることが可能になる。これによって、利用範囲の選択が可能になり、屋上までのアクセスが容易になると考えられる。

7) 都市居住にとっての有用性

「関係性」には、外部空間の性質の差別化、近隣コミュニティの創出、個人の生活の開示など多様な特性が見られる。これらの特性は、密集し、狭小な都市住宅において、生活の質を向上させ、居住者同士の繋がりを生む。また、相隣関係を持つ住宅間では隔離性は薄れ、屋上を介して繋がっているという意識を芽生えさせることで、世帯の枠を超えた集団が形成される。このことは、都市居住における屋上を媒介とした新たな共同居住のあり方を示唆していると共に、庭の補完・代替としてプライベート性が重視されていた屋上が独自の役割を持ち得る可能性を浮き彫りにしている。

討 議 等

◆討議 [鈴木]

既往研究について、本学関係のものが3つ並んでいるが、本学関係から既往研究を探したのか、他にはこういった研究は全く無く独創的なことなのか、どちらなのか。

◆回答：緑化関係の論文はたくさんあるが、屋上の使われ方に着目した研究は全く無いので、市大からのみ選んだ。後は、広告の置き方とか、屋上を利用する人の研究ではなく、屋上はどう見えるかという視点の研究はたくさんあったが、使われ方とは大きく離れていたの載せなかった。

◆討議 [鈴木]

相隣関係の論文はたくさんある。もうちょっと周りを見て、既往論文を書いて欲しかった。

◆討議 [宮本]

屋上空間の性質の中で、余白性というのが一番おもしろいなと思った。そっちをむしろ着目して欲しかった。相隣関係ばかりだと、基本的な話になってしまう。屋上の「残っちゃった感」が心理的にどう影響するのか、そこへの切り込みはないのか。それを期待した。

◆回答：ぼくと芝本の卒業論文でその辺りの研究はして来たつもりなので、今回は繋がりに着目したという位置付けで研究をした。

◆討議 [佐久間]

発表を見ていると、写真は無いのかと思った。ヒアリングを見ていると、屋上の多様性や繋がりがあっているのは分かるが、あまりイメージが分からない。

◆回答：本文にある。

◆討議 [佐久間]

後でゆっくり見ます。

◆討議 [徳尾野]

結論で最後に新たなコモンの可能性というのが一行入

っていたが、どんな可能性なのか。

◆回答：屋上は生活のエンドスペースで、自分の家から屋上へアクセスする。一番端にあるが、その空間がそれぞれの住居同士で繋がりを持つということが、地上にある共有空間とは違うものを持っている。

◆討議 [徳尾野]

可能性があるということは、屋上が無い住宅よりは楽しかったり、快適だったりするということ。それはどういう可能性なのか。

◆回答：地上の庭は誰でも入れて、他の人から見られるという意識から、利用がされにくい。それに比べると、屋上はその関係性を持っている人同士だけの離隔された空間という位置付けになる。コモン空間として見ると、より地上の庭よりはプライバシーが高くて、その集団では繋がりを持つことができるという所に利点があると思う。

◆討議 [徳尾野]

なかなか誰でも住みこなせる訳ではないということか。

◆回答：家族構成や趣味の嗜好によって使われ方の割合は変化するが、長屋 TEN に見られたように、屋上を利用してなくても、散歩をしたり、気分転換に上がったという使われ方も見られる。屋上が利用されていって、共有スペースという意識を強く持つことで、利用はされなくても、上がるだけで空間としての意味を持つのではないか。